

シンポジウム 「暗い」時代を生きる思想——歴史意識の現在—— 【趣意書】

「暗い時代」であると言われるようになってから久しい。それは日本に暮らす多数の人々にとって未来への展望が見出せず、社会が閉塞感に満ちた時代だということなのである。

現在の「暗さ」への嘆きは、過去の「明るさ」への憧憬がもたらしたものに違いない。テロや戦争の脅威から無縁な「平和」、犯罪が少なく女性が深夜に一人歩きしても大丈夫な「治安」、社会主義国よりも社会主義的でさえある「平等」、科学技術立国と高い民度を支える「教育」、世界最高の平均寿命を実現した「医療」、勤勉な国民性と高度なものづくり能力に支えられた「安全」、非欧米圏唯一にして世界トップレベルの豊かさを誇る「経済大国」、そして諸国を政治的・経済的・技術的に領導する「アジアのリーダー」…。こういったことが「明るかった」時代における日本国民の自画像であったであろう。要するに「暗い時代」の到来とは、国民の目前でこれら自画像の解体が進行し、回復するための方途すら見出せないことに他ならないのである。

かかる「明るさ」の喪失に至った背景となる要因を挙げることは比較的容易なことである。その第一は、財界や保守政治家、官僚といった日本の支配層がアメリカ主導のグローバル化に積極的に加担し、いわゆる新自由主義的改革を進めていった結果として、日本の経済と社会に深刻な変容が生じ、多くの人々にとって住み辛い国となりつつあることである。

第二の要因は、中国をはじめとするアジア諸国の急速な発展と発言力増大の結果として、日本の国際的地位の低下が顕著になってきたことに伴って、日本国民が抱いていた「大国」なる自国イメージとそれに基づくプライドが痛撃されたことである。

そして第三に挙げるべきは、東日本大震災と福島第一原発事故である。狭隘な災害列島たる日本に大量の原発を設置することの愚は明白であったのに、巨大資本の利権と核武装実現の野望の余地の確保のために、マスコミや学界を広く巻き込んだ原発安全神話の散布と、衰退に苦しむ過疎地域の人々への大量の公的資金の投入を通じた誘導が世界第三位の原発大国を生み出した。そしていずれは起こるべき災害が発生した結果として、あのような事態がもたらされたのである。

かかる「暗い」時代の到来に対する一つの応答として急速に興隆し世を席卷しつつある言説が、「明るかった日本」回復の要求と、「まだまだ捨てたものではない日本」への賛美である。この見地に立つ者にとっては、失われた「明るさ」は無批判的に肯定され、「明るさ」喪失の原因は日本社会の内部矛盾にではなく「外」に求められることになる。かくして、日本の「明るさ」を奪ったのは、だれにも責任のない不幸な大災害、謀略的な反日諸国やこれと結託した売国勢力、自己責任を果たさない怠惰な寄生分子や外国籍者、あるいは害毒をたれ流す左翼やフェミニストといった「外敵」で

あるとされ、そういった連中を撃退して日本国民を鼓舞することが「明るい日本」奪還のための喫緊の課題だということになってしまっているのである。そこまでラディカルではなくよりマイルドな日本礼賛の言説ならば、いまや至るところに溢れている。

多くの人々や政治勢力、マスコミが「明るさ」回復への明確な展望を示せず動揺するなか、断固とこの見地に立っているのが安倍政権とその積極的支持勢力である。ゼロ年代以降、日本の現状についての批判的認識と自公政権への不信が国民の間に高まり、それは09年に民主党への政権交代として結実した。しかし、一向に具体化されないマニフェストや打ち続く内部抗争、さらには震災と原発事故への無策ぶりによって、政権への支持は急減していく。他方、保守勢力の側においても主流的部分が明確な展望を示せないでいるもとの、最終的に極右的部分がヘゲモニーを掌握するに至り、戦後史上未曾有の反動政権が誕生することになったのである。そして、この政権は自らの見地を隠蔽するどころか、むしろ国内外へ向けて積極的に振りかざすことで、国民の裡に存在している「本当は素晴らしい日本」なる感情を積極的に動員し、自らの政治的基盤の強化と影響力の増大を図っているかに見える。そしてその勢いに乗じて、これまでの保守政権が成し得なかった諸政策を強引に推進するという「暴走」状態に突入しているのである。

もちろんかかる路線は、大局的には日本が直面する「暗さ」を一層深めるものに他ならないが、とは言え眼前の「暗さ」に打ちひしがれた人々にとって、「日本は悪くない」「日本は素晴らしい」なる言説は苦痛を忘れさせるアヘンとして作用する。そしてこの甘美な声にとらわれてしまった者たちは、歴史に正対し現実を直視することを求める呼びかけに対して、「日本を貶める敵」として激しく牙を剥くことになる。このような状況がヘイトスピーチ拡大の根本条件であることは言うまでもないが、さらに憂慮すべきは、大学や学界、教育界といった領域においてすら、このような声を援護射撃とした反動的政策の推進に抗して理性的・批判的言説を対置することに消極的な空気が広がりつつあることである。

かかる現状に対して、わたしたちに求められているのは何か。第一には、これまでとは異なる新たな日本社会の在り方を構想することである。そのためには、過去に真摯に向き合い「明るさ」が失われた要因にとどまらず、これまでの「明るさ」そのものを批判的に総括することが必要であろう。それはたとえば、過去の日本の繁栄なるものは、国内外の弱者へ負担を転嫁することの上に初めて存立しえたものではなかったのか、あるいは日本が達成してきた「豊かさ」とは、本当にその名に値するものであったのか、ということへの真摯なる検証を含むはずである。

第二には、これまでの「明るさ」を支えてきた「戦後体制」の限界を明らかにするとともに、新たな「明るさ」実現のための資源として生かせるものを発掘していくことである。たとえば戦後体制を支えてきた保守勢力の主流的部分は、多様な争点をめぐって左派やリベラル派と鋭く対立しつつも、侵略と植民地化の近現代史については一定の批判的認識を保持してアジア諸国との友好関係を重視し、また露骨な明文改憲に対しては躊躇を見せるという、それなりの理性とバランス感覚を備えた存在であっ

《シンポジウム》
「「暗い」時代を生きる思想——歴史意識の現在——

た。またこういった勢力はグローバル化に対応した規制緩和を求める巨大資本に依拠しつつも、同時に農山漁村や町内会・商店会といった地域のコミュニティにも目配りを欠かさなかったものであり、このことが結果的に大衆の生活の安定化に寄与してきたという側面も無視することはできない。こういったことに対しては、従来の保革対立の枠組みを超えた、より広い視野にたった評価がなされるべきだと考えられる。

そして第三には、日本を席卷しつつある思潮、すなわち日本を一方向的に賛美し、過去の直視と現状の批判的総括を求める思考を敵視して攻撃するような見地に正面から対峙し、これを封じ込めて大衆的な影響力を減殺していくための方途を模索することである。

そのように考えるならば、歴史意識の問題こそ喫緊の課題だということになるだろう。「過去のことはもう無関係」と歴史を切り捨てる見地や、「栄光の歴史」に酔い痴れる見地と対峙し、過去を批判的にとらえ返して未来への展望を切り開けるような歴史意識を、まずは私たち自身が鍛え上げていくことが求められているのである。